

日本労働年鑑 第54集 1984年版  
The Labour Year Book of Japan 1984

第二部 労働運動

XIII 政党

2 都知事選をめぐる各党の動き

社・共の対立

第一〇回統一地方選最大の焦点は東京都知事選であった。前回苦杯をなめた革新側のまき返しになるかどうか注目されたが、革新側の候補者選考は容易に進展しなかった。

八二年一月三十一日社会党都本部は臨時大会で美濃部革新都政を生んだ「明るい革新都政をつくる会」の解散を決定し、存続を主張する共産党とのあいだの溝を一挙に深めた。事態を打開するため、共産党は「革新都政再建をめざす各界連絡会」結成をよびかけ、これは五月一五日に結成された。一方、社会党も、八月二十八日に「革新都知事候補を選ぶ都民の会」を発足させ、革新側の都知事候補選びは本格化していった。

都留氏擁立の失敗

こうしたなかで、統一を求める動きも強まっていった。革新側の都知事候補選びが社・共別々で進められていることを憂えた都職労は、一月四日、社・共両党などに「革新統一」をよびかけ、一月十九日には、評論家の中野好夫氏など、三三人の学者・文化人も「革新統一」をアピール。一月四日に開かれた学者・文化人グループの「都民による都民のための都政を考えるつどい」で、都留重人・元一橋大学長の名前が出るに及んで、革新統一候補選出の動きは具体性を帯びた。このような経過をふまえて、八三年一月八日、社会党が、一月一〇日には共産党も、都留氏に正式に出馬要請をおこなった。しかし、一月一三日、都留氏がこれを正式に断わつたため、候補者選考はふり出しにもどり、革新側の候補者選びは混迷の度を深めた。

二転三転の候補者選び

都留氏擁立失敗の五日後、一月一八日、社会党都本部は社民連の田代表に出馬を打診。新たな候補者擁立に向けての動きを開始した。実際には、田氏擁立の動きはかなり早くからあり、八二年五月七日、社会党都本部と総評幹部らが田氏と会見して、出馬をもちかけていた。このとき、田氏は明確な意思表示をおこなわなかった。しかし、一月一三日の出馬打診にたいしては、「出馬の意思はない」と言明。二月二日、市民運動団体の「都民の知事をつくる会」がアンケートをもとに独自に出馬を要請し、二月五日、革自連も擁立を決めるなどの動きがあったが、二月一八日、田氏は最終的に不出馬を表明し、田氏擁立も失敗に帰した。

このような動きと並行して、一月二三日、社・共両党、総評など二六団体が集まって、「東京都知事問題緊急各界懇談会」が開かれ、「反中曽根、反鈴木」を軸に、(1)軍拡に歯どめをかける、(2)政治倫理を確立する、(3)都民生活を擁護する、(4)民主都政の実現をはかるという具体的課題で一致できる候補者を一月末日までをメドに擁立、統一候補とすることが申し合わされた。二月四日の第二回懇談会では、社・共・総評・革自連・市民団体など一三団体で小委員会を構成。その後、小委員会

で名前のあげられた縫田嘩子女史、磯村光男元副知事などにたいして出馬打診がなされたがいずれも拒否された。二月一九日の四回目の懇談会では、候補者選びをより精力的に進めるため、中林貞男生協連会長、富塚総評事務局長らの五人世話人会を選出。この世話人会によって候補者は佐々木秀典、松井康浩両弁護士に絞られた。だが、社・共両党間の調整がつかず、二月二八日、中林氏にあっせんが一任された。

### 中林あっせんの不調

あっせんをまかされた中林氏は、三月二日、「候補者を佐々木秀典とする。ただし、社会党籍をはずし、全国区候補を辞退し、東京地方区に出馬しないことを条件に革新統一候補とするよう努力する」との結論を示した。これを受けた富塚事務局長は、事前におこなうことになっていた共産党をふくむ革新団体、学者・文化人との協議を省略してただの報告にとどめ、そのまま記者会見にのぞんで公表するという強行突破の拳に出た。これにたいして、共産党の上田副委員長は、(1)これまでの知事選で、社・共共闘でたたかった社会党籍を抜けた候補者が、その後の国政選挙で社会党公認候補となり、何度も裏切られてきた、(2)公表の仕方がルール違反だ、と強く反発。記者会見の場で富塚氏と激しくやりあって、候補者選びはまたも暗礁にのりあげた。

### 松岡氏で社・共共闘成立

ところが、社会党の推す佐々木氏は、三月五日、「自分の出馬は、革新の亀裂を更に深める」として、不出馬を表明。同夜、中野氏ら学者・文化人グループも社・共トップ会談をを求める声明を発表した。このようななかで、社・共両党も話し合い再開に応じる意向を示し、三月九日、飛鳥田・不破党首会談が開かれた。席上、両氏は政治評論家の松岡英夫氏擁立で合意。要請を受けた松岡氏は翌一〇日、正式に立候補を表明し、ここによりやく革新統一候補の擁立がなった。

### 保守・中道の動き

都議会議会与党の自・公・民・新自ク四党は、八二年六月一七日、鈴木俊一現都知事の擁立を確認。前回同様、保守・中道連合で都知事選をたたかうことになった。この動きをうけて、八三年一月一九日、鈴木知事も再選出馬を正式に表明。二月二六日には、後援会事務所開きをおこなうなど、革新側のもたつきぶりをしりめに、着々と体制を整えていった。結局、選挙突入直前に革新統一候補として松岡英夫氏が決まったため、東京都知事選は、自・公・民・新自クの推す鈴木俊一氏、社・共・革自連の推す松岡英夫氏という、保守・中道対革新の一騎打ちとなった。

日本労働年鑑 第54集 1984年版

発行 1983年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 ●

2001年8月28日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1984年版(第54集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---